

The background of the entire page is a deep blue color, overlaid with a repeating pattern of white, stylized waves. The waves are depicted with multiple curved lines to represent the crests and troughs, creating a sense of movement and depth. The pattern is consistent across the entire surface.

神戸大学能楽部  
八十周年記念誌

平成二四年度



神戸大学能楽部 80周年記念祝賀会

八十周年記念祝賀会会場 ANA クラウンプラザ神戸にて



八十周年記念自演会 藤井観譚会舞台にて



▲ 藤井徳三先生



▲ 舞囃子「胡蝶」

# 神戸大学能楽部八十周年記念誌 ●目次●

|  |                    |    |
|--|--------------------|----|
| ご挨拶  | 師匠 藤井徳三.....       | 5  |
| 八十周年に寄せて   | 顧問教官 竹林英樹.....     | 6  |
| 神戸大学能楽部八十周年に寄せて  | 前顧問教官 井川一宏.....    | 7  |
| 八十周年に想う  | 凌霜謡会会長 里井三千雄.....  | 8  |
| 謡曲礼賛   | 旧 20 回生 松井逸三.....  | 9  |
| 能の心を永遠に  | 新 4 回生 牧千雄.....    | 10 |
| 高野山の合宿   | 新 5 回生 林哲夫.....    | 15 |
| 謡の神様に出逢って  | 新 11 回生 前田紀一郎..... | 16 |
| 謡曲の聴し出すステキな香り  | 新 13 回生 戸次威左武..... | 18 |
| 謡との関わり   | 新 15 回生 森本雅昭.....  | 19 |
| 能面と謡曲  | 新 16 回生 安藤幸雄.....  | 20 |
| 再会も謡曲と鑑能で  | 新 18 回生 武内安雄.....  | 21 |
| 風韻会記念にあたって   | 新 19 回生 西田美恵子..... | 22 |
| 褒めない   | 新 56 回生 一色俊哉.....  | 24 |
| 妙議案待庵で能楽を思う  | 新 60 回生 阪本康一朗..... | 26 |
| 能「粘」についての一考察   | 里井三千雄.....         | 27 |
| 幹事長挨拶.....   |                    | 30 |
| 八十周年記念事業寄付者ご芳名   |                    |    |
| 八十周年記念自演会番組.....   |                    | 31 |
| 自演会出演者・祝賀会出席者ご芳名.....  |                    | 33 |
| 能楽部一謡曲を中心として.....  |                    | 34 |
| 神戸大学能楽部 神戸大学風韻会 OB 会 東京凌霜謡会 凌霜謡会<br>大学教官謡会 神戸大学宝生会             |                    |    |
| 八十周年にあたって  | 新 13 回生 段野治雄.....  | 36 |
| 八十周年の基点について 会誌「風韻」の名を廃すことについて<br>現役学生と卒業生との交流の場として 寄贈明細 結びにかえて |                    |    |
| 神戸大学能楽部歴史年表.....   |                    | 38 |
| 神戸大学能楽部名簿.....   |                    | 42 |
| 編集後記.....  |                    | 48 |

## ご挨拶

師匠 藤井徳三

神戸大学能楽部設立八十周年、誠におめでとうございます。

私は、平成七年に父の藤井久雄より学生指導の立場を受け継ぎ、十七年間部員の皆さんの指導を参りました。八十年という歴史に比べれば氷山の一角にすぎませんが、部員の皆さんと共に過ごせたことを大変嬉しく思います。

また、能楽部がこれほどの長きに渡って続いて来られたのには、OBの皆様並びに関係者の方々の並々ならぬご助力があつたものと存じます。この場を借りて厚く御礼申し上げますとともに、今後とも変わらぬご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

若い方々が意欲的に能楽を学んでくださり、次代へ継承し続けてくださるのは、能楽師として非常に幸せなことです。ぜひ百年、二百年と末長く続いてもらいたいと思います。能楽部の益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

## 八十周年に寄せて

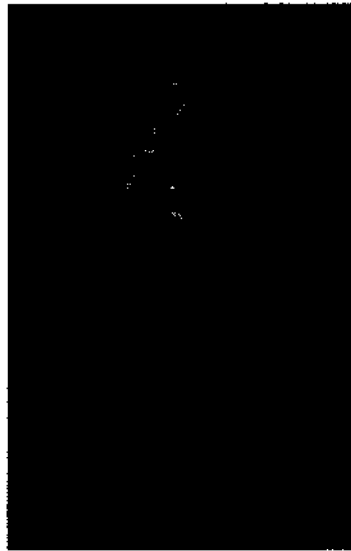
顧問教員 竹林英樹

この度、神戸大学能楽部は創部八十周年を迎えることができました。故藤井久雄先生より引き続き熱心にご指導頂いている師匠の藤井徳三先生をはじめ、多くの先輩方、関係者の皆様に感謝申し上げます。

私は、前任の井川一宏先生が大学を退職される際に、神戸大学の教員としてたまたま大学に残っていた能楽部OBでしたので、ご指名を受け、顧問教員を引き受けさせて頂きました。学生の頃からあまり熱心な部員ではありませんでしたので、現在も名ばかりの顧問教員で、幹事長を務めてくださる学生さんが年に数回研究室を訪ねて下さる際に、活動の様子などを聞かせて頂いておりますが、ほとんど役に立っておらず、お恥ずかしい限りです。

今回、創部八十周年を迎えるにあたり、現役の部員が中心となり、OBの皆様にも協力頂いて記念事業実行委員会を立ち上げ、記念誌の発行、記念会の企画等を進めて頂きました。学生として自分の講義や演習、実習に加え、能楽の練習だけでなく、記念事業の準備が重なり、大変忙しい中での準備だったかと想像いたします。特に、師匠へのお願い事や相、先輩方や顧問教員への連絡や相談など、普段の学生生活の中ではあまり遭遇しない緊張する場面が多く、大変だったのではないのでしょうか。

八十周年を迎えるということは、現役の部員が経験しているのと同じように、貴重な体験をされた先輩方がたくさんおられるわけで、伝統の重みを感じます。今後も師匠の藤井徳三先生には色々ご面倒をおかけすることになりますが、引き続きご指導のほどよろしくお願い致します。



「翁」 丹羽啓裕

## 神戸大学能楽部八十周年に寄せて

三人の師匠、宇治正夫・藤井久雄・藤井徳三先生と

三人の神戸大学名誉教授、藤井茂・米花稔・荒川祐吉先生

前顧問教官 井川一宏

神戸大学能楽部に関係される皆様に、八十周年のお祝いを申し上げます。その後半の一部（一九七七年―）に個人的なかかわりを持たせていただいたことに誇りに思い、感謝しております。その間に三人の師匠の先生および三人の神戸大学の先輩の先生と交わる機会を得ましたことは私の人生を豊かなものにするうえで、大きな財産となりました。現在もそうですが、能楽部OBの方々が、積極的に支援してくださったことにも、頭が下がります。紙面を借りまして、私事を振り返りながら、御礼を申し上げます。

私は能楽・謡曲とはかけ離れた環境でそだち、趣味的にも体育会系の部活動に興味をおぼえる存在でした。二年のアメリカ留学を終えて帰国し、少し落ち着いた一年後（一九七七年）、名誉教授の藤井先生と経済経営研究所の米花教授から「井川くん、謡いをやりませんか」と誘われました。藤井教授は、私の所属する国際経済学会の重鎮で東の一橋大学に對する西の神戸大学のリーダーで、米花先生は私の所属する研究所の前

所長であり、お誘いは重みを持ったものと感じて従うことになりました。当時の能楽部顧問教官の経営学部荒川教授は、後継ぎ候補者として喜んでくださいました。

当時の能楽部師匠の宇治先生の指導は、「謡曲の練習を通じた、人間の正しい生き方の伝達」と受け止めました。「清貧を尊びその中で高い志を保つことの正義」を学んだように思います。先輩OBの方々の多くのの中に、その生き方を見ることが多々あります。私の稽古日には必ず参加くださった藤井名誉教授からは、その交わり中で人間関係のあり方を教わりました。米花教授は発表会前の稽古に参加され、のびのびとしたお声と、謙虚でさわやかで楽しい生き方を見せてくださいました。荒川教授はお忙しくあまり稽古に参加されないのにお上手なことが不思議で、謡曲においても非常に合理的に会得されていることが伺えました。

次の師匠を誰にお願いするかは、私は理解していませんでしたが、とても重要なことだったようです。神戸大学の地位にふさわしい師匠をとるということで、名実ともにふさわしい藤井久雄先生にご無理をお願いして快諾を得てホッとされたと、荒川教授から伺いました。一九八三年度になつてからと思います。私は顧問教官を引き受け、能楽部は新しい師匠から教わることとなりました。なにしろ藤井久雄先生は、湊川神社に能楽堂を建てる大事業を達成された方で、評価能力に欠ける素人でも特別とわかる自在なお声をお持ちの方です。私は稽古で先生の前に座るだけでその偉大さに圧倒されました。神戸大学能楽部の学生部員の数が、だんだん少なくなるという流れの中で、逆に学生一人当たりの指導時間が増えることにもなり、久雄先生になつて仕舞や発表会における舞囃しが増え、六十周年の発表会（一九九二年湊川神社神能殿）では能「土蜘蛛



「蜘蛛」を演じるまでにレベルの高いものとなりました。藤井久雄先生は常に一段（時に数段）高いレベルに挑戦することの大切さを教えて下さったと思います。そのご貢献に対して、神戸大学から感謝状を出していただきました。一九九四年久雄先生の米寿のお祝いの会が湊川神社で行われましたが、翌年の神戸の震災では、先生のご自宅に被害がでて先生も少し体力を減じられ、神戸大学でも何とか能楽部の活動を維持するのに手一杯の状態でした。私も個人的な稽古はストップしてしまいました。

震災復興を機に、藤井徳三先生に師匠を引き継いでいただきました。徳三先生はそれ以前にも学生の発表会などでいつも助けていただきました。このボランティア活動を意義あることと位置づけて、指導していただいています。感謝に耐えませんが、徳三先生は厳しい能楽修行の道を歩いてこられたと伺っています。学生の気質の変化にも柔軟に優しく対処してください。お宅でお目にかかるのですが、徳三先生は能楽師としてピタツとはまっておられ、何事にも品格があり美しい振る舞いが身についておられると感じます。学生にそれを学んでほしいと思っています。

私は二〇〇七年三月で神戸大学から京都産業大学に移り、家庭環境にも変化があり、能楽部の活動から少し離れ、大変申し訳なく思っています。能楽部OBの献身的なご支援を受ける中で、八十周年を機会に少しでも復帰したいと考えております。

## 八〇周年に想う

凌霜謡会会長 里井三千雄

今年には神戸大学能楽部創部八〇周年を迎える事になり心より祝意を表します。

八〇周年と言えば発足は昭和七年ですが、人間では傘寿（八〇才）に該り、因みに私は今年傘寿を迎えますので二重に喜びを覚えます。

八〇周年という永い年月を思い出すと、幾多の諸先輩から現役学生に至る迄の多くの方々のご努力ご支援があった事が惚ばれ、深い敬意と尊敬を感じざるを得ません。

私はいつも凌霜謡会で自分でも痛感し、又会員の皆様にも申し上げている事ですが、僅か年二回の開催にも拘らず、お役の方のお誂いも素晴らしいのですが、全員の地謡がピタツと整然と揃い、そのレベルの高さに驚きます。

私は他にも二、三の謡曲の会に参加していますが、とても凌霜謡会の高いレベルには及びません。事前の合せもなく、又年々新入会員を迎えて初めてお会いする方も居られるのに。

これは何故かと考えましたが、やはり歴代の師範、宇治正夫、藤井久雄、藤井徳三各先生のご熱心なご指導とそれを真摯に受けとめお稽古に励まれた諸先輩から現役学生に至る迄の皆様のご精進とやはり同じ学窓

に学んだ仲間意識と申しますか、そして永い神戸大学の歴史と伝統が支えとなって今日に至っている様に思います。

最近、会長として悩んでいますのは、年々新入会員が増加して大阪凌霜倶楽部の会場が狭くなってその中、新しい会場を探さねばならなくなつて来ていることです。

しかし考えて見れば、他の謡会の話聞きますと会員の高齢化が進み、亡くなる人や退会をする人が増えて閉会せざるを得ないそうで、そんな会もある事を思えば逆に嬉しい悲鳴かも知れません。

話は少し交りますが、これからの能や謡曲の将来について考えるのに参考になればと思ってお話したい事があります。

私の関係している大槻能楽堂では毎月一回自主公演能を開催しており、最近若い人や外国人のファンも増えてほぼ満員の盛況です。

やはり日本の古典芸能や伝統芸術を見直して、その良さを再確認したいと思う層が多い証拠だと思われまます。

しかし一方能を観て実技として仕舞や謡曲をやつて見たいと言う方は中々少ない様です。以前に比べるとお弟子さんが減少していると能楽師の先生方も困つておられる現状です。今は昔と比べて沢山の芸術や音楽があり趣味も多様化して居るので、止むを得ない点も圧かも知れません。

私は大槻能楽堂で能・狂言の普及活動のお手伝いをして小・中・高等学校へ宣伝活動を行つたりしていますが、小学生の方が関心を示して、笛や太鼓を習い始める人が出て来ました。やはり出来るだけ若い中から始めるのが良い様です。

どうか凌霜謡会の会員の方もご自分の御子様や御孫様にお薦め頂けたら有難いと思ひます。

最後に益々の能楽部の発展と皆様のご健勝をお祈りしてご挨拶と致します。

## 謡曲 礼賛

旧二十回生 松井逸三

今年神戸大学能楽部が、八十周年を迎えられるに当り、自己紹介と、能楽部の皆様にいさゝか助言を述べてみたいと思ふ。

在学中は硬式庭球部に所属していて、謡曲とは無縁であった。

ところが、社会人となった三年目の昭和二十七年、親友の柳原さん(同じ昭和二十五年の卒業で現在東京凌霜謡会の幹事)の推めで謡曲を始め以来病みつきになってしまった。師事したのは宇治先生と同じ大槻門下の里井先生で、奇しくも凌霜謡会の里井会長の御父君である。会社の仕事で三回に分けて計約十二年の海外勤務生活を体験したが、常に百番衆を持参し、謡いを続けていた。

三回目の任地イタリアはミラノでの或るパーティーで、ほろ酔い気分  
で「羽衣」のキリを謡ったら、そのトーンはイタリアオペラのファイナ  
レでしばしばコーラスの合唱によりクライマックスに達するあのトーン  
によく似ているとのことで、拍手かっさいを博したこともあった。

尚、会員の上野さんとは偶々同じ職場で働き、又その謡曲同好会で長  
期間山本門下の秋浦先生に師事して、同先生主催の発表会に、数回一緒  
に出演したことも、なつかしい思い出である。

平成十二年仕事をリタイアした折、里井会長の推せんで、凌霄謡会に  
入会を許され今日に至っている次第であり、柳原さんの推めでこの道に  
入り得たことに感謝して体力の続く限り謡い続けたいと願っている。

さて私の乏しい経験から皆様に助言したいことは、

(一) 申す迄もなく謡曲はお能の一部であるから、出来る丈多くお能を  
觀賞すること。それは少しでも立体的に謡うことの助けになり、技術の  
向上につながるから。

(二) けい古の前に、けい古本の解説を熟読して曲趣の理解に努めるこ  
と。謡う前に全文章を朗読することも面白い試みと思う。

(三) 謡曲に親しみを持つため、クセ、小謡、独吟(段ものを含む)等  
を無本で謡えるよう努力すること。これも技術の向上につながるど確信  
する。

(四) 師事する先生のけい古内容をよりよく把握するため、許可され、  
ばテープをとること。

(五) 謡曲に興味を持つ若者が減りつつある様であるが、出来る丈多数

の後輩の勧誘に努力すること。卒業後は凌霄謡会に入会し、生  
涯の友として謡曲を続けること。

以上とりとめもない事を書きましたが、少しでもお役に立てるなら幸  
いと存じつつ、又最後になりましたが、神戸大学能楽部の益々の御発展  
を祈念してこの拙稿を擱きます。

## 能の「心」を永遠に

新四回生 牧 千雄

元弘三年(一一三三)、大和国結崎あたりに、一人の男児が生まれ、清  
次と名付けられた。

時、恰も鎌倉幕府がこの年に崩壊し、後醍醐天皇の建武親政が始まっ  
てゐたが、天下は清和源氏嫡流とされる足利尊氏と、南朝方とに二分さ  
れ、攻防と混乱の世であった。尊氏は新田義貞軍を破り、建武三年(一  
三三六)、京室町に幕府を開き、北朝の光明天皇によって征夷大將軍に任  
じられてゐる。爾後、尊氏は日本の中世である「室町時代」の幕を開き、

飛鳥・天平・平安・鎌倉の上代の伝統の上に対明貿易の巨利をもって、新たな文化と産業経済体制を構築し、南北朝騒乱を巧みに切り抜ける政治に加え、わが国の民衆文化を高度化し、新しい美意識と下克上のエネルギーによって、三代將軍義満の時には室町文化の華を咲かせることに成功したのであった。

このやうな時代背景の大和に生まれた清次は、それまでの撰閣政治下の社会に行はれてゐた「下賤の技、大衆芸能」や「下層民による農村神事」などを起点として多武峰談山神社に奉納され、次第に人気を得ていた「山田猿楽本座」の一忠によって芸を学んだと言はれている。

清次は、山田猿楽の美濃大夫といふ者の養子の三男を父とし、宝生大夫を長兄に持つてゐたとされているので、いわば「大和猿楽の中心に生れ育った」といえる。

その頃の猿楽は、未だ芸能としての評価において田楽の後塵を拝してはゐたものの、すでに大和四座が、その存在を誇つてゐた。即ち、清次の生まれた南北朝から室町時代の初期には、興福寺・法隆寺などの寺付きであった諸座が、春日大社の神事に出仕し、また結崎座は談山神社にも出仕するなど、次第にその芸質も向上する途上にあつたと察し得る。因みに、後に清次の子 世阿弥元清の「風姿花伝」によれば、外山（宝生）・結崎（観世）・坂戸（金剛）・円満井（金春）と、今日における四座の祖が、すでに出揃つてゐた。

清次はやがて結崎座の棟梁となり、芸名を観世とした。

これは後に出家して法名を「観阿弥陀仏」としたことによると言われる。

「観世」は後に流儀の名となり、清次はまさしく流祖としての名譽を、没後も誇ることにまつた。

観阿弥は結崎座の棟梁として、自らの卓越した芸風と、

「自然居士」「草子洗小町」「通小町」など今日でも演能頻度の高い能を作つて自演し、また、当時、流行していた「曲舞」の音曲を巧みにアレンジして能に取り入れ、

音曲としての完成度を著しく高め、舞台芸術としての能の芸術的価値を、飛躍的に高めたことは、驚異に値する。

「この最初のクセ舞と詞章は、能「白髭」であつたとされ、今日でも三大難クセの一であるとされる。

私は、観阿弥の功績は、単に舞台芸能としての能への貢献としてののみ揚されるのではなく、「如何にして、人間というものの悲しい性（さが）を、物語性ある舞台で表現するか」、あるひは「人の持つ業（ごう）の恐ろしさ」や「命を捨てても守るべき愛情」や「人生における孤独」「神と人との交わりにみる信頼感」といった、人間として迷はれない現実を、極めて単純化された所作と洗練されたリズムと、聞いて快いが力強い音曲で、美しく舞台上に展開するといふ大きな芸術的展開を見事に果たした功績をあげ、能に永遠の命を与えたことは、まことに疑ないことと思ふ。まさしくそれは、日本文化のなかで、人間の心を芸術によって、洗練された技法で美しく昇華させたとおもふ。

今日、能が五流それぞれに独自の特徴を維持しながら、ワキ方と狂言

も含み、囃子各流とともに、高い芸術性と深い人間表現の技能を保って、わが国独自の美を保ち続けてゐるのは、もとより能楽専門家や学者、愛好家の力が大きい、そもそも、能という芸術は、「人間の心の深層を極めて美しく抉り出す芸術」「見るものに人間としての心の持ち方を考へさせる作用をもつ芸術」として「能それ自体が永遠の命を備えてゐる」のであると私は信じて疑はない。

さて観阿弥は座持ちの棟梁として、また大和猿楽の代表的役者として、興行的才能をも發揮し、能を「信仰の舞台芸能だけではなく、都会的な鑑賞に堪えうる芸術と

しての変貌を成し遂げた。これによって、猿楽能は完全に田楽能を超えて、高い完成度を達成し得たと言える。

観阿弥は応安四年（一三七一）摂津の須磨に勸進能を催した記録がある。すなはち大和から畿内への本格的進出の嚆矢と言はれる記念碑である。

また、その頃醍醐寺での演能があり、京での評判が一举に高まったと言はれる。そして、永和元年（一三七五）歴史にも名高い今熊野での勸進能を、時の將軍足利義満が観覽し阿世阿親子の虜にとり、パトロンになった。

もともと足利尊氏はじめ源氏諸將は、田楽能の最層であつたが、義満が猿楽能を異常に賞したこと、一挙に世評も猿楽能とりわけ結輪座の評価を高めたとされる。いずれにしても、観阿弥の偉大な芸術的才能と

興行的努力が、能楽に今日まで六百五十年の命脈を与えて積み重ね、さらに遙か将来までの芸術としての命までも吹き込んだと、いえるだろう。それは、観阿弥によって能に吹き込まれた「日本の心」が、能に永遠に続く生命力として、働いているからであらう。

#### アイ語り（暫時 中 入）

私は現在、奈良市に住んでいる。生まれ故郷は神戸であり、神戸大学を出て五年経つまでは、六甲台正門のすぐ下に住んでゐた。

宇治正夫師範に師事していた神戸大学風韻会は、二十五人程度の会員を擁して、明けても暮れても正門脇の木造学生集会所に屯してゐた。入部したときは、師範が来航される日に掃除と茶の用意をし、師範の下駄を揃えることを命じられて、謹んで励んでいた。コンパのときは肉野菜その他の材料を買ひ、七厘に炭火を熾し、先輩が着座されるのを待つといふ作法から教育された。柚木馨教授（民法） 藤井茂教授（国際経済） 林喜楽教授（労働法） 米花稔教授（経営立地論） 荒川祐吉教授（配給組織論）などと、天下に名だたる諸教授が宇治風韻会の舞台で同席され、大学風韻会も歴史と格式を誇る名門文化部の名をほしいままにしていた。

卒業後、私は仕事次第で国内外を動き続け、海外や関東を移り住んだ末、奈良に居を持ったのは、一つには日本歴史の原点である大和に大きな魅力を持つてゐたので、半ば衝動的に居ついてしまったのである。さ

うは言っても、現在の住居は、奈良盆地の北西端で、すぐそこは京都府相楽郡になる地に開けた地域である。

それでも、東大寺興福寺をはじめ、白鳳・天平文化の残香ある大寺をはじめ、三世紀から残る巨大古墳の数々や、飛鳥京跡などに行くのは、それほど距離でもない。だが、私にとって嬉しいのは、結崎座や外山座の故地をみて、木陰からひよいと少年鬼夜叉が現れないかなどと思ったり、大和棟の屋敷から、謡や囃子が聞こえないかなどと勝手な想像をすることが許されるのが、楽しく、嬉しい時間なのだ。

奈良は金春流（円満井座）発祥の地である。奈良新県立公会堂は、春日神社と東大寺の間にある立派な建物だが、本格的な能舞台が備わっており、金春流の定期能などが催される。

ご存知の向きも多いと思ふが、毎年十二月十七日には、春日大社若宮の祭礼「おん祭り」が修せられ、夜を徹してお渡り社で奉納される古式ゆかしい芸能奉納には、金春流家元はじめ、下懸り三流が交代で翁を勤められ、影向の松の下でも能が奉納される。いづれも大和猿樂の原点を見ている趣であり、一度は拝観をお勧めする。

奈良にゆかりの能も数多く、謡蹟めぐりも多い。

采女 当麻 花 二人静 采女 春日龍神 井筒 百萬国栖 三輪 葛城 龍田 吉野静 谷行 野守 吉野天人 土蜘蛛 大仏供養 など。

閑話休題 後シテお幕

貞治二年（一三六三）後に二代観世大夫となる、児が観世家に生まれた。幼名を藤若（前名 鬼夜叉）と名付けられたが、実名は元清。即ち 十二歳のとき、観阿弥に従って舞台を踏んだ鬼夜叉は、その美童ぶりと父親阿弥の教育による教養ぶりで、たちまち五歳上の將軍足利義満の寵を受け、京の公家衆社交界の星となった。そのため、多方面の教養が身につけて、後日多くの芸論書を著し、父の境地からさらに高度化された芸域と、それを裏付ける理論的体系と美学的思想を完成する土台としたと言われる。また、公家代表格の二条良基も鬼夜叉の美童ぶりと才能に没入し、多くの支援を与えたいへ、藤若の名まで与えてゐる。

やがて藤若は父親阿弥の芸境を受け継ぎ、それをさらに洗練して、独自の境地を築いてゆく。父の芸名や座名として使はれていた観世が姓と同じと認識されたが、本人は秦河勝の子孫と称した。

世阿弥の業績第一は、二十一篇の能楽論書をかきのこしていることである。世阿弥が今熊野の勅進能でデビューしたときは、父親阿弥はずでに四十二、三歳に達していたが、観世座のスターであり、大和猿樂のリーダーであった。しかし、世阿弥が二十一歳のとき、観阿弥が没し、俄かに観世座の棟梁を相続した。多くの難題に襲われたと察するが、融通性に富んだ世阿弥は、父や競争相手の特徴を巧みに取り入れ、観世風に発展させて新しい芸境を次々と開発していった。先代の物真似主体の芸風から、歌舞を前面に出した芸風を編み出し手芸術性を大いに高め、さらに芸論書を執筆して、それを理論的に照明していった。

世阿弥はまた能作者としても卓抜した才能を発揮した。京の公家や武家との交流を土台に、文学的素養を蓄積し、伊勢物語や平家物語、さらには多くの歌集歌道書を咀嚼し、多くの文学表現を連ねた掛詞を駆使して、多くの夢幻能を書き下ろした。それらの美文調で味わい深い能は、世阿弥が確立した序破急論に裏づけられ、彼が創始した多くの優美な曲節に彩られて、今日、我々の前に置かれてゐる。

また世阿弥の残した論集は「風姿花伝」「音曲口伝」「花鏡」「至花道」はじめ「猿樂談義」まで、膨大な内容であるが、一貫して世阿弥の意識の中心には常に「花」がすえられてゐたのである。

応永二十九年（一四二二）ごろのこと、世阿弥は出家する。観世太夫の地位は子の元雅に譲ったが、演能は引退せず、円熟した境地を保っていたと伝える。しかし、応永三十五年（一四二八）に足利義持が没し、還俗した義教が將軍職を襲ってからは、世阿弥への信頼感が急速に衰へ、甥の元重へと寵愛がうつり、観世にとつては苦難の日々となった。次々と後継者が没し、観世本流が断絶し、失意のうちに佐渡へ流罪となった世阿弥は、「金鳥書」を著し、永享八年（一四三六）二月までは生存がわかつてゐるが、その後は八十一歳没との伝承が残るのみである。

世阿弥は中世の芸術家として、稀代の合理性と獨創性をあわせもち、しかも融通性に富んだ人柄であったことが知られてゐる。さればこそ、観阿弥の創出した、「観世猿樂能」を大成させ、今日までも伝承される、「生命力のある芸術」を残得たのである。

観世能はもとより、能楽界全体が、多くの危難を克服して、今日なお、能の生命を保っているのは、多くの人々の力によるものと思ふが、「能自体に備わっている生命力によるものであると、私は信じる。

因みに付言すれば、世阿弥は論書「花鏡」の中に名言を残している。中でも「初心忘るべからず」は屢々誤解されて引用される。世阿弥の真意は、次の原文を読めば明らかである。

是非初心不可忘

時々初心不可忘

老後初心不可忘

即ち、未経験の事態に立ち向ふことを初心といふので、「老いること」にも初心が必要なのだ。

このやうな認識があるが故に、私は世阿弥の「能」は生命力を自らもつてゐると、考えるのである。

神戸大学能楽研究会は、旧神戸大学風韻会創設から教えて八十年を迎えることは、卒業後五十三年になる筆者としても、同慶の限りであり、今日まで後継者を育て、会の隆盛に尽力された先輩と後輩の皆様は、感謝と尊敬を捧げたい。しかし、わが神戸大学謡曲部の命脈は、「能の持つ生命力、観阿弥世阿弥の流祖が創出された不滅の「能のもつ日本の心」によって、今日まであること、そして、未来永劫まで耐えなき生命力で

あることを、お互いに銘じることに致したい。

神戸大学能楽部万歳。凌霄謡会万歳

## 高野山の合宿

新五回生 林哲夫

私が風韻会（神大謡曲部）へ入ったのは同期の仲間達より大分遅く三年生の一月です。ゼミの藤井茂先生（風韻会々々長）のお勧めを断り切れず年末の発表会を見学に行きました。

六甲台正門内の古ぼけた学生集会所で初めて謡を聞きましたが、終演後の茶話会で饅頭をご馳走になったのが運の尽きで年明けから練習に参加することになりました。練習は毎日昼休みに行われましたが同期生は皆上手で、中には指導頂く宇治正夫先生の稽古場で直接謡や仕舞を習っている人も居ました。幹事長の上野君が親切に教えてくれましたがなか

く声が出ず、皆に合せて口を動かしているだけでした。もうやめようかと思ひ始めた矢先、夏休みの高野山合宿が決まり、上野君がわざわざ家まで誘いに来てくれたのでとにかく行ってみる事にしました。

高野山の夏は涼しく、僧坊は広くてのびのびと謡が出来ました。質素な精進料理でしたが練習後の食事は結構うまかった様に思います。五泊六日で帰りの日曜日を除き毎日練習しました。練習はレベルに応じてグループ分けされ、初心者の方は一級下の堤・塩津両君と一緒に同期生の指導で謡いました。午前・午後各二〜三時間の練習で竹生島と経正をやりましたが、三日目位から少しずつ声が出る様になり経正のクセを謡う頃には少し謡らしくなった様な気がしました。土曜日の夕方一年先輩の牧さん（富士銀行）が陣中見舞いに来られ、この日は夕食にビールが出て先輩の話をお聞きました。座興に小謡「臍」を教わりましたが、女人の体に五穴あり云々。牧さんのお許しを得ておりませんので、残念乍ら公開は次の機会に譲ります。合宿のお陰で謡を続ける決心がつき、秋の発表会では草紙洗小町の買之をやりました。

卒業後は神戸の日本毛織に就職しましたが幸い謡の同好会があり、藤井久雄先生一門の潮昭寿先生のご指導を受けました。年一回熊内の藤井能舞台で日毛グループ合同の発表会があり、紋付を新調しましたが、藤井久雄先生の地頭で熊野のシテを謡ったのが一番の思い出です。若い盛りで仕事も遊びも忙しく、温厚な先生に甘えてついく稽古をさぼり勝ちだったことが未だに悔まれます。

昭和四十六年本社が大阪へ移転して稽古が出来なくなり二十年餘のブ



ランクがありました。退転後神戸市のシルバークレッジ（老人大学）に入學し、謡のサークルに入って練習を復活しました。自主練習ですが中にはプロの修行をした方も居られ謡の奥の深さを教えられました。又数年前からは旧宇治先生の練習グループ（現在は凌霄謡会練習部会）に参加し、まだく年には負けられぬと頑張っております。

年末には傘寿を迎えますが、私がこれまで謡を続けて来られたのは高山の合宿に加え、良き師や先輩・友人に恵まれたお陰と深く感謝する次第です。

## 謡の神様に会って

く先輩がいて後輩がいるく

新十一回生 前田紀一郎

大学に入學してすぐに謡曲部に入ったが、当時姫路分校の食堂の二階

がお稽古場で、将棋部や囲碁部や詩吟部と共用していた。一年生数人が入部し、指導は都留好子先生といひ五十歳台であったろうか、穏やかな優しい先生であった。映画『二十四の瞳』の女先生が年を経たような感じであった。謡曲と仕舞の手ほどきを受けた。教養課程の一年半を修了して六甲台学舎に移ったあとも折々にお声が掛つてかなり永くお付き合ひが続いたように思う。断片的な風景はセピア色になってはいるが、謡曲を習い始めた身にとっては恵まれた出会いであったと、有難いことであつた。

二年後期から専門課程に進み、上級生に囲まれた部活へと移つていった。日々の練習や合宿の折々に先輩や仲間たちと過ごした日々が懐かしい。

指導は宇治正夫師。謡や仕舞や舞囃子のお稽古をつけて頂いたが、師の演じられる能を観る機会が屢々与えられて、「能のシテ方」の凄さ、プロのもつ芸の深さ厚みを垣間見ることになる。先輩がいて後輩がいて僅か二年半の短い期間のことは、五十年前のことなので残像は白黒写真のようであり、部分的にくつきりした強い線が消えることなく残っている。今レッスンを受けているヨガの年若い先生から「まずは、正座／金剛座に座つて！」。五十年前に宇治先生から、「正座」の指導を受けたことが思い出される。

卒業後数年間は宇治先生の稽古場に通つたが、やがて普通のサラリーマンになり転勤族になって、能謡曲から離れてしまった。空白の二十五年である。

凌霄話会に加えてもらって十余年になるが、私にとって最も価値の高い話会である。

藤井茂先生や米花稔先生を含めて三十以上も年上の大先輩が、北極星であり昴星であり南十字星の如くで、多くの先輩はキラキラ星群の如くに思えて大興奮した時のことを今でも鮮やかに甦ってくる。毎回の「こと」精進研鑽された円熟の謡の数々を聴かせて頂いて、こんな有難いことはない。強い調べ、閑静な調べ、地頭さんの統率のもと、一糸乱れぬ「地」は見所で聴いていて心地よく、地座で合吟させてもらうのは、また、特別に誇らしく覚える。近年は若い世代の参加者が増えて、新しいエネルギーが溢れて年毎に上手になっていく。七十代が一鞭当てられる機縁となっている。

数年前に、原敏郎先輩のつよい推奨を受けて、現役合宿短期間ながらお邪魔するようになった。自分の若かりし頃を思い出しつつ、超若手世代と謡の時間がもてる楽しみと与えられるのが嬉しくて有難いなあ……。

六十四歳で地元のアカレッジの謡曲部に籍を置いた。大半は六十代から謡を始めようとする同世代の人たちで、自分の大切な高齢期に謡曲を選択した人たちである。彼らとの交友は、先述した大学同窓の謡友とは異なっており、楽しく貴重なものである。

彼らを誘って募って、「佐渡島薪能づくしツアー」（平成二十一年六月二泊三日）と「王祇祭参拝（黒川能見物）をメインとする真冬の東北観光大ツアー」（平成二十四年二月 五泊六日）を催行した。この折には同窓の久下昌男君（十一回）、楠田美樹君（十四回）も参加してくれて、道中のどこかで皆で謡曲数番を謡うことを織り込んだ。いずれも地元各村

人が独自に伝承してきた。民衆芸能の力強さを観た。平素知っている、政ごとの中央で洗練され完成された「能楽」とは異なった舞台をみせつけられて、大変な感動を覚えた。（詳細報告は、久下昌男ホームページ「氷心玉壺」↓「なんでも紀行の小部屋」）伝統芸能文化は、プロ集団が受け継いできたものとは別に、民衆が細々ながら「現在までつないでつづけている」ものが各地に残されていることに気づかされた。

田楽／猿楽の流れを汲む能楽がどのようにして地方に波及伝播していたのか？ 各種神社の祭礼のなかで、人々が神々との交歓の際には能楽がどのように位置付けられていたのか？ とても興味深いテーマにつき当たっているこの頃である。

このことに気づくのが十年遅れたが、いまからでも時間を作って、探し訪ねて身を運び、出来るなら同好の志と誘いあって、「その時間」を共有したいと考え始めて情報を集めたり寄せられたりするうちに、以外にも近隣で、つまり日帰りや一泊程度で行ける候補地がいくつかあると判ってきた。久下君を誘って予備調査を始めよう。これなら多くの謡友にお誘いを掛けることができるぞ！

謡を通して幅広い世代の多くの人たちと触れ合うことができるのは、ほかの何にも代えがたい、ありがたい謡の神様からの戴き物である。

謡曲を習い始めたころには想像もできなかったことであるが、謡を軸にした生活がこんなにも愉快で楽しいものかと、人生の熱秋期の只中にて実感している。望むらくは、足腰が立たなくなった頃に、平家物語と謡本を併読しながら、謡友たちとすごした日々を懐古しながら「その時」と

き”を迎えたいものだ。

## 謡曲の醸し出すステキな香り

新十三回生 戸次威左武

ステキな香りのする花は周りの人をこよなく嬉しくしてくれます。謡曲の声にも花と同じように醸し出すいろいろな香りがあります。

あるプロの先生の地頭の時、その先生の醸し出すステキな香りが、私の身体の中に入ってきて、身体全体が健康になり、何とも言えない愉快な気分になったことがあります。そして謡い終わった後のさわやかさ、あの感覚は今も私の身体の中に残っています。

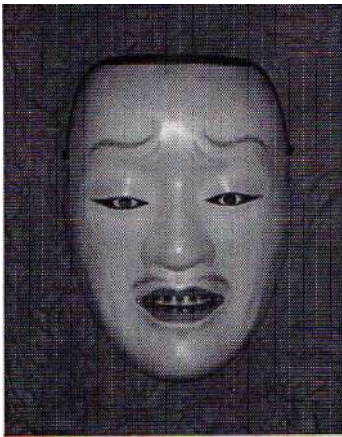
「謡曲はこれだ！」と思いました。

それでは、そのような声を出すにはどうしたらよいか。好きな専門家の録音テープを何回も何回も聴いて発声法を真似る。自分の声を録音し

て聴いてみる。姿勢を正しくして下腹から声を出すように鍛練する。今もいろいろ試しています。地頭をする場合、あの先生のように、自分の声の香りが周りの人に伝わって、少しでも多くの人が気持ちよくなってくれたらと願いながら謡っています。謡った後「気持ちよかった」と言ってくれると嬉しくなります。

人の世においても、自分からステキな香りを出し、周りの人に行き渡り、それが波紋のように広がって、周囲を和ませ、そこに笑いの輪ができる。みんながそのように心がけると社会が明るくなると思います。花は一生懸命に咲いています。素直です。そしてステキな香りを出します。人も一生懸命にステキな香りを出すよう努めなければなりません。

私もまだまだ修行が足りませんが、謡曲においても、人生においても、周りの人にステキな香りを出せるように、これからも努力していきたいと思っています。



「郡鞆男」 安藤幸雄

## 謡との関わり

新十五回生 森本雅昭

能楽部八十周年おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

我々が入学した一九六三年は、教養課程が姫路と御影の兩分校に分かれていた最後の年でありました。入学時のオリエンテーションで、二年生女子の仕舞を見て、何となくフラツとして風韻会に入部しました。姫路では熱心に練習しました。合宿も欠かさず参加しました。都留好子先生的好楓会にも出席して、懇親会での「野球軒」も楽しみました。しかし、二年生になっても後輩は入学せず、寂しい思いをしました。

専門課程に移ってからは、学業が楽しく、忙しくなったため、クラブ活動は疎遠になり、ほとんど練習に行かなくなりました。それでも四年生としての秋季大会には、「蟬丸」を舞わせて頂きました。ゼミ全員が応援に来てくれました。

卒業後は、日立製作所に入社しました。謡曲部に入りましたが、練習に数回通う内に、違和感を覚えるようになりました。それは、「語り」などで、北関東特有の「なまり」を感じたのです。いまだに日常会話が関西弁の小生には、方言に対する偏見はありませんが、伝統芸能では違う

と思います。そんなことで、謡からは足が遠のきました。

その後、家で練習してみることもありましたが、前の道を通る小学生が「この家にお葬式があるの」と言っているのが聞こえてきて、がっかり肩を落としたものです。

会社での環境が変わった五十五才頃から、思い出したように、始業前の早朝とか、昼休みに声を出すようになりました。しかし、先生につき時間的余裕は相変らず無く、かえって、やればやるほど本筋から外れてゆくような気持ちに襲われました。そんな時、ある人が「素謡のCD」があるので、それを聞きながら練習してみてはという助言をくれました。神田の「檜書店」で「観世流謡曲名曲撰」を購入し、ヘッドホンでこれを聞き、二音くらい遅れながら声を出す練習を始めました。

今は退職し、時間はたっぷりありますが、今度は出不精になり、先生につく元気も無く、ぼちぼちと以前のままCDでの練習を続けています。最近では、能の構成や、その背景に流れる思想に影響を与えたと言われる「唯識」に興味を持ち、勉強し始めているところです。

学生時代の手習い事が、高齢者の無聊を慰めてくれている事に感謝をしています。

能楽部の益々のご発展を祈念し、駄文を終わらせて頂きます。

## 能面と謡曲

新十六回生 安藤幸雄

平成元年二月からある「能面教室」に通い続けている。社会人になって約二十年経った頃のこと、「謡曲や能」から全く疎遠になっていた時、たまたまある能面師と知合いになり、その主宰する「能面教室」に見学に行ったのがその始まりなのであります。

土曜日 月三回通い続け、現在は二十八番目の作品「泥眼」を制作中。

「小面」・「孫次郎」・「若女」・「曲見（しゃくみ）」・「増女」・「翁」

「小牛尉」・「般若」・「安達女」・「狸々」・「平太」・「邯鄲男」・「山姥」・「大飛出」・「大癡見（おおべしみ）」・「小獅子」・「獅子口」などなどを制作してきた。

初めの頃は一つの作品が完成するのに約十ヶ月かかっていたが、最近には特に大物でなければ、約半年で完成にこぎつけている。

能面は流派により呼び名が異なることもあり、現在約二百種類以上の能面が使用されている。大きく分類すると、①翁面系、②尉面系、③女面系、④男面系、⑤鬼神面系、⑥怨霊面系、⑦妖精面系に分類される。

櫓の柱目の角材に手本になる能面の型紙と写真をもとに鉋、鋸、鑿、彫刻刀などの道具を使って能面を彫り上げ、櫓のヤニを焙り出し、胡粉と岩絵の具と膠で彩色し、墨で髪の毛や髭・鬢を描き、唇に朱を入れる。そして、セピアなどで古色を付けていく。

このほか、裏面は焼印で作者名の刻印をしたあと漆を塗って仕上げるとか、能面によっては表面に金泥を塗るとか、眼や歯に真鍮の板を彫金して金メッキを施すとか、髭や髪の毛を植毛するなどあらゆる技術を駆使して能面は完成するのである。

三年前の平成二十一年に会社勤めを卒業すると同時に謡曲の稽古を再開したため、最近には能を観る機会も増えてきた。そして能を観る時は『どういう能面が使われているのか』が演者と同じくらい興味の対象になってきている。特に前シテが女面や慈童とか尉面で登場し、後シテになって平太や黒髭や大飛出とかの面に大きく変化する場合の能に強く興味を惹かれるものがある。

また、謡曲の稽古の時は我流ではあるが、謡本の前の解説を読み、使用の能面の種類を確認し、その能面にあった曲趣、声の調子や

拍子を自分なりに考えて謡うようにしている。反対に謡本の解説を見て、この曲のこの能面を作りたいと思うようにもなっている。

「能面と謡曲」の二つの趣味を継続することは時間的には厳しい時もあるが、相互に理解が深まることはいいことだと考えている。またそれぞれに奥が深く、名工・名人の足元にははるかに及ばないが、未熟は未熟なりに日々精進を重ね、残りの人生を少しでも彩の

あるものになればいいと考えている。

## 再会も謡曲と鑑能で

新十八回生 武内安雄

三月も押し迫り、新年度は目の前だった。余韻を味わう間もなく社会に旅立つ希望と不安の中、卒業祝賀会を後輩が行ってくれた。大学紛争は卒業期日まで影響したが、全員無事三月に卒業できた。お開き近くになり、谷村君が「明日も同じ日が来て、同じように皆に会える感じがするのになあ」と、感傷的発言をした。

その四年前、男性七人、女性六人の入部者が卒業時は男女五人ずつになった。週二〜三回の練習と春夏の合宿は、狭い室内で行われ、家族的親密さが自然に醸成される。

風韻会の活動対象は能の一部である謡曲・仕舞である。世間の活動人員は非常に少なく、学園祭の発表会に友人を招待しにくい等マイナー感もあるが、芸術性の高い古典芸能に自ら参加でき、日本文化にも慣れ親しんでいった。活動としての謡曲は、腹筋を使って唸るように声を出す。

地謡では合唱のように調和も必要。演目の位置付け、構成・演劇性・詞章等々、探求しなくても謡うだけで爽快だった。四年間継続できた要因だろう。とは言え、能楽研究も鑑能を通して行われた。それは退屈な辛い時間でもあった。当時、演目の解説本も少ない上に、皆で事前事後に話し合うことも殆ど無く、それぞれの感性・主体性まかせてあった。

三十年振りに関西（姫路）に舞い戻り、風韻会の関西在住者と交流が再開された。姫路近辺在住者と『鷲嶽会』を発足させ、謡会と、能楽研究にも取り組んでいる。鑑能頻度も飛躍的に高まった。しかし、馬齢を重ねただけなのか、鑑能は今でも退屈だ。「退屈な能舞台を何故人は鑑賞するのか」が目下のテーマだ。この課題解決突破口を東京の舞台で初めて感じる事ができた。音程と音質まで明瞭に揃った地謡、その他謡の詞章とシテの舞・所作を際立たせる囃子方のクリーンな音色おんしよくと掛け声、全てが舞台上で協奏調和してたのだ。64歳にして初めて舞台を美しいと感じた。

能市場しとよは能楽師と稽古弟子と、ほんの一握りの好事家から成り立っている。謡曲稽古人口も減り続けているが、演能回数は高齢者に支えられ漸減傾向で留まっている。

「鶯風会」では、地域能楽普及も視野に入れた活動方向であるが、現在の能の演出表現では、能ファンが拡大するとは思えない。

演目に着目すれば、「清経」「砧」の夫婦愛、特に妻側の一途さ、切なさを表現する詞章や構成には、素直に共感でき、謡にも想像力を働かせながら感情を入られる。謡う喜びが有りながら、舞台は表現しているのだろうか。

能市場の活性化は、総合芸術足り得る舞台演出を意識した興業的感動ある能舞台が求められているのではないか。クラシック音楽やオペラ鑑賞後の高揚感が得られないのは何故なのか。

再開した仲間と熱のこもった謡会は四十年の空白は無かったかのように再開された。谷村君発言は皆の風貌が変わっただけで再現されたのだ。能楽研究と併せ、感動的な能舞台演出など今後の能楽について楽しく語り合える仲間だ。

そして、東京で味わった、美しく感動的的舞台にも皆と一緒に再開できるだろう。

## 風韻会記念にあたって 風韻会から鶯風会

新十九回生 西田美恵子

八十周年記念、誠に目出度く存じます。この風雅なクラブは、現役とOBが手を携え、連綿と受継がれた類ない存在といえましょう。

風韻会当時は年齢もあり、自然を愛でる風流な詞章に心酔するもの、むしろ執念めきながらも伊勢物語等や古今・新古今等で美しく彩られた詞章に心惹かれたものです。一方、能「邯鄲」の「一炊の夢」は人生の迷いを吹き飛ばす衝撃的演出であったと、今以てその感動が刻み込まれています。世間に出てから心構えの一つとなった能です。

さて、人生前半の還暦まで小学校教育に携わり、好きな詞章の影響もあり何年生であつても子どもに百人一首を朗詠させたものですが、親子も意外に喜びました。それが能の一步と思いつつ、でも能に直接触れる念願が叶ったのは退職の年度で、江崎金治郎師の尽力でやっと装束着付・謡・囃子の体験ができました。尚、師は卒業式に紋服袴姿で来賓として能をアピールし、親も地域にも満足して頂きました。

この一週間あとの退職後より赤穂市文化会館に勤務するや、降って湧

いたように梅原猛原作の新作能「河勝」を赤穂で開催する興味深い企画に携わる事となりました。京都の梅原氏宅（元和辻哲郎宅）で、聖徳太子の寵臣『秦河勝』が能楽と舞楽の祖であり、赤穂坂越浦に漂着・終焉を迎えたゆかりの地、赤穂でこの能をしたいと熱く語る哲学者梅原氏を昨日のように覚えていきます。それも解説講演は旅費のみで、有難く思いました。（注1）

これらの仕事、謂わば人生の中入後の舞台に踏み込んだかの如く、能楽界を垣間見、それに関わる面白さを満喫致しました。大槻文蔵師には舞台設定や解説書作成・プレ公演など力添えを頂きました。また直かに申し合わせや鏡の間の様子、また一期一会に賭ける迫力が舞台袖にいる私にまで伝わってきました。その折りには大勢の凌霜のOBに鑑能頂き感謝しております。

一方、十九回生の還暦前後、武内氏が謡会『鷺風会』を姫路で主宰し、高島氏や私も再び同級生と謡に親しみ、後に姫路近隣の18回生の前田氏、二十回生の中崎氏も会員となりました。今、謡や能・謡跡巡り等のよもやま話で活気に溢れ、会員相互の活動の橋掛かり的存在になっています。

また、赤穂市文化財団発行の冊子に能楽エッセイの連載にあたり、題材に中間的表情の女面、明治混乱期の歴史、特殊演出小書の面白さ等を取り上げるにつけ、鷺風会員や里井氏、久下氏から感想や示唆を頂き、謡以外の観点も楽しむようになりました。

並びに国立能楽堂と連携した公演に関し、企画制作課と再々の打合せがそれに限らず、能の見方の示唆や世阿弥自筆本の研究による演出等の

先端情報が併せ得られ、これも能に触れる多様な切口の面白さと思えます。能に携わる様な事が巡り寄せてくると思ってみましたが、これも風韻会のベースと鷺風会等の支援あってこそといえましょう。

人智で抗い難い無常を感じた人生の折節に、業平と邯鄲がその都度よぎったことが蘇ってきます。今改めて、様々な愛惜の情や抒情性に浸るとき、暮色に感動する折、或いは昔を懐しむとき、『一炊の夢』が月と重なり、現か夢かその余情が夜の帳に霞み紛れていくように思えます。

「月やあらぬ 春や昔の春ならむ 我が身ひとつはもとの身にして」

〜伊勢物語四段

注1 世阿弥「風姿花伝」と榊竹「明宿集」に河勝が、蘇我入鹿の難を逃れ赤穂市坂越浦にうつほ舟で漂着したこと、河勝の息子達が雅楽・能楽を受け継いだ旨などが記載されている。



## 褒めない

新五十六回生 一色俊哉

私が能楽部を引退してから二年が経つ。能楽といえば、現役の頃は身近なもののような気がしていたのが、今では懐かしく思い起こされるものになってしまった。少し残念な気もするが、これも学生から社会人になった証のひとつなのだろう。

社会人になると、叱られることが減る一方で、それ以上に褒められることがなくなるものだ。特に私はフリーの仕事をしているから直属の上司というものがないので、私を褒めるべき立場の人がいない。先輩や教授たちに囲まれた学生時代とは大違いである。最初は寂しかった。しかし不思議なのだが、最近ではそれがだんだんと居心地よくなってきたのだ。例えば、学生の頃は「学生にしては」とか「若いのに」とかの修辭がついてこそ褒められたのが、同じことをしても今はお世辞しか言われない。ベテランと呼ばれる方々に心から褒められるには、彼らが心からすごいと思えること、あるいは何十年も掛けて成し遂げられなかったことをしなければならぬ。これは、そう簡単には越えられない壁である。そんな大きな壁に出会うと、なぜだろうか、なんとなくいい気分がする。

武者震いとか燃えるとか、そういう類の気持ちではない。もっと落ち着いた安心に近いような気持ちである。それが何なのかよくよく考えてみると、能楽部にいたころのある原風景にたどり着くのだ。

今の現役員たちと同様、私も学生の頃は藤井徳三先生に謡と舞を師事させていただいた。思えば徳三先生も私を褒めてはくたさらなかった。それと同時に叱ることもなさらない。他大学の師匠方はそうではないらしい。稽古中に舞台から突き落とされたなんて話を聞いたこともある。そんなふうに厳しく稽古を付けられるという話を聞くと、確かに羨ましくないことはなかった。白状すると、徳三先生に物足りなさを感じていたこともある。しかし、叱りもせず褒めもせず、ただ基本のみを教えるという先生のなさり様は、学生時代に他では得られない貴重な体験を与えてくださったように思う。

先生は学生が希望する曲に反対されることがほとんどなかった。そうなる私に調子に乗る性質だから、重い曲から稀曲に至るまで、学生らからぬ曲を随分やらせていただいた。新作の菊水まで謡わせてくださったのだから、曲の自由さでは関西の能楽部でも随一ではなからうか。もともと、先生は内心苦々しく思っておられたかもしれないが。

さらに、先生は謡も舞も細かなことはおっしゃらない。明らかに型が違うとか、もっと強く、もっと大きく見たいなことはおっしゃるが、手の角度がどうかかそういうのは見せ所以外あまりおっしゃらないのだ。おそらく細かい部分は学生に期待しておられないのだろう。そうすると、私は自然とやりたい曲をやりたいようにやることになる。それが楽しく

てしようがない。プロの舞台を拝見してかっこいいと思つたらほとんど真似してみた。他流派のまで真似てみた。そうするともちろん先生に直されることも多いのだが、いくつかは指摘なさらない部分もあつて、それがあたかも自分の持ち味のように思えてくるのだ。おかげで自分の好みの謡い方や舞い方のようなものができてくる。それがまた楽しい。

たまには厳しくしなければ、人間というのはとことんまで付け上がるものである。そのうちさらに調子に乗つて、先生に褒められることを目指すようになった。先生に「うまい」と言わせるという目標をこつそり設定しておいて、なんとかさうなるよう稽古中に仕向けてみるのだ。もちろんそんなことは分不相応にも程があるのだが、とにかく目標ができるとやりがいもできるものである。ますます稽古が楽しくなり、自分ではかなりうまくなつたと思つていた。しかし、自分なりにどんな癡つたことをやってみせても「だめ」と言われてばかりだつた。そしてついに引退するまで「うまい」の一言を聞くことは一度もなかつた。

もし、万が一、あの時先生が一度でも「うまい」とおっしゃつていたらどうなつていただろう。仮の話だが、もし先生が私を褒めておられたら、おそらく私はそれ以上の稽古をしなくなつていたのではないかと思う。舞にしろ謡にしろ、その褒められたときのやり方をいかにコピーするかに腐心するようになってしまつただろう。そうなると芸能は死んだも同然。私は能楽の楽しさを見失つていたかもしれない。逆説的だが、私にとっては先生が褒めてくださらなかつたからこそ、能楽が楽しかつたのだ。

ある舞台上、私は山姥の舞囃子をさせていただいたことがある。先生は私のために稽古用の杖を作つてくださった。一番も特別なお道具を貸してくださつた、私にとつて最も思い出深い舞台である。数ある曲のなかで、最も稽古に励んだ曲かもしれない。その稽古中のことである。私は張り切つていろんな型をいろんな方法で試していた。自分だけの山姥にするために勝手なことばかりやつては、その悉くを先生に直されるというのを繰り返していた。そんなある日、私のある型を見て先生がただ一言、「そう」とだけおっしゃつたことがあつた。驚いた。普通ならそんな褒めたうちに入らないだろうが、当時の私には今まで先生からお聞きした中で最も肯定した言葉に聞こえたのだ。結局それが学生時代に聞いた先生のお言葉の中で最上級の褒め言葉となつた。そのときは当然、飛び上がりたくなるくらいうれしかつた。しかしそれと同時にもう一つ、ほんの少しだけ寂しい思いをしたのを覚えている。やはり、どこか肯定してほしくないという思いがあつたのだ。そのときは漠然とした感覚しかなかつたが、もうこの型を稽古することはない、という考えがうつすらと浮かんだのかもしれない。認められることの喪失感、とでも言うべきか。そういう気持ちを初めて実感した瞬間だつた。

今、私は政治家を志している。政治家となればあらゆることが批判の対象になるだろう。しかし、批判、否定されるからこそ、私は政治を続けるだろう。そう考えるきっかけになつたのが、能楽部である。そこでの出来事は、そのひとつひとつがこれからの私にとつての原点になるに違いない。そんな能楽部八十年の歴史の一角を担えたことを、私は感謝

するとともに誇りに思っている。

## 妙喜庵待庵で能楽を思う

新六十回生 阪本康一朗

能舞台は見所から見ると広く思えるが実際は思うよりも狭い。能楽を始めて四年目の夏、ひよんなことから能「天鼓」の地謡に参加する機会があり、その時初めてこのことに気が付いた。それまで見てきたのは見所から見る舞台で、シテはそれなりの広さの中で動き回っているように見えた。しかしいざ地謡座からそれらを見ると、何重にも着物を着て着膨れしたシテに対し、舞台は狭苦しく見えた。どうやら能舞台には見所から見ることによって実際よりも広く見えるような工夫があるのかもしれない、僕の気のせいかもしれないが。

それから数か月後のある秋の日、前に記したものはまた別件で、かつて千利休が建てたわずか二畳の茶室「妙喜庵待庵」を訪ねた。能を始

めて以来よく聞いてきた「能の特徴はシンプルさにある」という言葉を頼りに、同じく無駄なものを省くことよってできた利休の茶室を見れば、今後能楽に触れるにあたって何か役に立つものが得られるかもしれないという思いからであった。現在はその茶室内に立ち入ることはできず、入口から室内を眺める事しかできない。しかし二畳というわずかな空間に必要な最小限の装飾がなされたその空間からは、入口から眺めるだけでも二畳にしてはやや広いようなそんな印象を受けた。きつと実際に室内に入れば、外から眺めるよりももっと広く広がっているように見えただろう。

さて先にも書いたが、能舞台は見所から、すなわち舞台の外から見ることによって広さを感じることができる。一方で妙喜庵待庵は、その室内に入ることによって空間の広がりを感じ取ることができる。室外から感じる広さと室内から感じる広さ、能楽と妙喜庵待庵の間に通ずるものを見出すべく来たはずが、二者の大きな特徴は相反するように最初は思えてしまった。

しかしこれら相反する特徴にこそ、両者の共通点は存在した。それは「客」の意識である。能楽の主催者、つまり主役である「シテ」として客とは見所に座っている人間たちの事である。その人たちに広さを感じさせるためには、見所から見ると舞台がどれほど広く見えるかが重要となってくる。一方で茶道における主催者、つまり茶を点て接待する「亭主」にとつての客は、亭主の目の前にいる。亭主と同じ部屋の中にいる人間に対して空間の広がりを感じてもらうには、その部屋を中から見るることによって広く感じるようにしなければならない。一見して全く違う特徴を持つ能楽の妙喜庵待庵であるが、共に「主催者にとつての客に対

していかに広さを感じてもらえるか」という、客をもてなすための同じ目的のもとで生み出された特徴である。

見に来てくれた客をいかにもてなすかを重視する。考えてみればごくごく当たり前のことであるが、妙喜庵待庵を訪ねて改めてそのことを意識し、今後能楽に触れるにあたってどう考えればよいかの考え方を個人的にまとめることができた、そんな大学四年目のある一日の出来事。



「獅子口」 安藤幸雄

八十周年記念自演会で素謡『砧』が出されるにあたり、里井三千雄氏が執筆された『砧』についての能楽研究をここに転載いたします。

## 能「砧」についての一考察

里井三千雄

能「砧」は王朝文芸や鎌倉期の軍記物などを典拠として本説正しい能を書くように努めてきた世阿弥が、晩年になって庶民的な素材を、彼が確立した幽玄の美学で処理しようとした野心作で、作詞作曲とも優れており、現行曲二百数十曲の中、屈指の名曲とされている。曲のあらすじは左記の通りである。

九州芦屋の何某(なにがし)(前ワキ)は訴訟のことで上京して三年になり、故郷の事も気になるので今年暮れには必ず帰るといふ便りを侍女の夕霧(ツレ)に持たせて帰る。夕霧は芦屋に着き、主人の妻(前シテ)に会

い、その由を伝える。夫の帰りを待ちわびていた妻は、それを聞くと一層恋慕の情がこみ上げ三年の留守のつらさを訴え、侍女と共に秋の夜長に月を眺め砧を打ち、中国の蘇武の故事や七夕の契りを思つて心を慰めるが、そこへ今年も帰れぬという報せが入り、妻は夫が心変わりしたものと思い乱れ、病の末死んでしまう。(中入)やがて夫は帰つて来るが妻の死を知り梓弓すきこうにかけて弔うと、瘦せ衰えた姿の妻の亡霊(後シテ)が現れ、恋慕の妄執のため鹽地獄の苦しみにあつてゐることを訴え、夫の不実を恨むが、法華經読誦の功力によつて成仏する。

近代劇的な目で見ると前場の時間経過がやや不明確で、夕霧の着いた日に砧を打ち、そして死んだようにとれるが、これは下人(アイ)の語りにもあるように、何日間かが経過してゐるのである。これは自然的時間を超越して連続した内的時間を表現したものと解釈される。

中年の女の独寝の焦燥、愛の悲しみ、忘却への怨み、そうした生々しい人間的苦悩が詩情豊かに描かれており劇的な内容を持ちながら、三番目物的な優雅さがある。

ところが世阿弥が次男元能に筆録させた芸談集「申楽談儀」(注1)の中に「静かなりし夜、砧の能のふしをきまじに、かやうの能のあぢはひは、末の世に知る人のあるまじければ、書きおくものぐささよし、物語せられし也。しかれば、無上無味のみなる所は、あぢはふべきことならず。又、書きのせんとすれども、更にその言葉なし。」として後世の人

には「砧」の能の味わいはとても理解出来ないであろうとしている。

事実、慶長年間の文書に「蟬丸、大原御幸、砧、座敷謡」とあり、能としての上演が中絶し、素謡専用の曲であつた時期がかなり長かつた様である。一体、世阿弥が「かやうの能のあぢはひは、末の世に知る人あるまじ」といつた「あぢはひ」は何を指しているのか、私はかねてより疑問に思つてゐた。

今日、全国各地の能楽堂で秋の名曲として「砧」が上演されているのに何故世阿弥は後世の人には分るまいと言つたのであろうか。これは単に世代の相違による人生観や価値観に依るものだけであらうか。実はこの点は現在も学者や研究者の間で意見が分れてゐる難問である。観世寿夫氏(注2)は、この後世の人にその味わいが分らないと世阿弥が嘆いたのは、彼としては珍しくアイロニカルな物言いで、実は「砧」という作品に対する自負の裏返しとも考えられ、又その反面、彼がこの作品に一抹の不安を残してゐたと思えると思つてゐる。人の心の中の鬼、つまり言葉を変えれば怨念といつても良いかも知れないが、人間が生きる上での苦しみや悲しみといった、より人間的なもの。そうしたものとして鬼(亡霊)を捉え、それとまともに対決した作品を改めて書こうとして「砧」を作つたのではないかと述べられてゐる。

次に戸井田道三氏(注3)は「砧」の中の左記詞章の中の「思ひ出は身に残り」に注目されている。

鄙ひなの住まひに秋の暮れ、人目もかれがれの、契りも絶え果てぬ。何を頼まん身の行くへ。三年の秋の夢ならば、三年の秋の夢ならば、憂きはそのまま覚めもせで、思ひ出は身に残り、昔は変り跡もなし。げにや偽りの、なき世なりせばいかばかり、人の言の葉嬉しからん、おろかの心やな、おろかなりける頼みかな。

この「思ひ出は身に残り」の言葉を戸井田氏は異様に感じられ、普通の意味ならば自身に残るといふ事で特に身に意味がないかも知れない。しかし、主題が妻の閨怨のこととなると単なる記憶ではなく、肉体的な感覚を通しての思ひ出として作詞されていることを指摘され、それが世阿弥を愛した足利義満や二条良基などの庇護者へのつきぬ回想を含むものであることと述べられている。

確かに、この部分にしみわたる情のほてりとさびしさとは、世阿弥その人の劇的な生涯を反芻した告白的詠歎と考えても、決しておかしくない重厚な抒情を持つており、一生ひととの夢の破れた悲傷感が胸を打つ。それは正に静かなりし夜粘の能について問われた時の世阿弥自身の感慨を誘発する部分であったと思わせられる。ともあれ、数百年の年月を経た今日、日本はおろか海外の観客に迄深い感動を

与えている能を作った世阿弥のエネルギーに驚嘆する他はない。

(注1) 世阿弥「申楽談儀」(表章校註)(岩波文庫)

(注2) 観世寿夫著「心より心に伝ふる花」(白水Uブックス)

(注3) 戸井田道三著「観阿弥と世阿弥」(岩波新書)  
(平成二十四年二月記)



「小面」 丹羽啓裕

## 幹事長挨拶

石原宗一郎

神戸大学能楽部は平成二十四年をもちまして、創立八十周年を迎えます。こうして八十周年を迎えることができましたのも、ご指導いただいた先生方及び先輩方、お世話になった皆様のお陰と深く感謝しております。この十年の間、一学年に部員が一人という過酷な時期もございましたが、現在では部員数が二桁まで増えており、よろこばしく存じます。能楽は日本の誇る芸能です。先輩方から受け継がれてきたこの素敵な部活を、これからも絶やすことなく繋げていきたいと存じております。皆様におかれましては、どうぞ今後ともご支援いただけますようよろしくお願い申し上げます。

また、この場を借りて八十周年記念事業執行のためお世話になった皆様に、厚くお礼申し上げます。

### 神戸大学能楽部八十周年記念事業寄付者ご芳名(敬称略)

|       |      |      |       |
|-------|------|------|-------|
| 井川一宏  | 竹林英樹 | 平田二郎 | 松井逸三  |
| 西川孝夫  | 高岡幸彦 | 柴田栄一 | 田中稔一郎 |
| 上原元典  | 石田輝夫 | 仲巖   | 小林悦夫  |
| 五十嵐康祐 | 諏訪秀行 | 楠田哲夫 | 熊野博   |
| 里井三千雄 | 服部龍治 | 福永肇  | 林哲夫   |

|        |       |       |       |
|--------|-------|-------|-------|
| 上村篤信   | 中嶋幸伍  | 西野公三  | 堤文男   |
| 青木岑生   | 大道一雄  | 長尾隆夫  | 原敏郎   |
| 福田好男   | 松岡誠夫  | 永田守男  | 左鴻雅義  |
| 中島圭吾   | 前田紀一郎 | 久下昌男  | 森澤展裕  |
| 大西和夫   | 植杉浩一郎 | 安田芳治  | 山本正人  |
| 有田榮一   | 佐々木肇宏 | 戸次威左武 | 黒田昌吾  |
| 段野治雄   | 野村公男  | 大林治郎  | 楠田美樹  |
| 小野山久美子 | 尾島洋三  | 三宅晃   | 近藤八千代 |
| 丹羽啓裕   | 川上勝美  | 森本雅昭  | 安藤幸雄  |
| 大島浩子   | 藤本吉郎  | 吉田健一  | 芥川美和子 |
| 八十嶋敦子  | 向濱幸雄  | 湯浅憲之  | 菊地侃   |
| 酒井孝子   | 武内安雄  | 川邊利招  | 谷村鉄郎  |
| 西田美恵子  | 高島千明  | 井上京子  | 河野豊   |
| 中嶋和美   | 福田啓介  | 飯田博江  | 山口剛司  |
| 山神明    | 山中佳代  | 長永恭子  | 伏見正章  |
| 伏見和政   | 猪熊昌代  | 新庄真裕子 | 東裕子   |
| 木村邦子   | 反田雅之  | 門之園辰志 | 井関浩一  |
| 野田功    | 萩野千夏  | 梅戸由香里 | 梅園健治  |
| 内藤茂    | 堀内克己  | 村上卓生  | 大出直子  |
| 石塚誠治   | 安田幸宜  | 安田里美  | 南麻弥   |
| 小島岳史   | 渡橋章子  | 藤原雅樹  | 濱村桂子  |
| 戸中希    | 一色俊哉  |       |       |

平成二四年十二月一日(土)

十時始メ

神戸市中央区熊内町二ノ一ノ二十  
於 藤井観誼会舞台

# 神戸大学能楽部自演会番組

連吟

花

月キリ

シテ田中 貴瑛

OB素謡

実

盛

シテ河野 豊

ワキ伏見 和政  
ワキツレ武内安雄

OB連吟

玉之段

シテ段野 治雄 川邊 利明  
武内 安雄 黒田 昌吾  
梅園 健治 戸次威左武

OB素謡

藤

戸

シテ尾島 洋三

ワキ佐々木肇宏  
ワキツレ前田紀一郎

仕舞

狸々々

田中 貴瑛

経 正クセ

佐々木 萌

素謡

敦

盛

シテ田中 貴瑛

ワキ竹内勇輔



鞍馬天狗

仕舞

二人 静クセ

シテ岡崎 幸子  
ツレ岩田 葵

善 界

三島 駿平

素 謡

子方中川 天海

シテ佐々木 萌  
ワキ岩田 葵

仕 舞

熊 坂

阪本康一朗

連 吟

シテ佐々木 萌

千 手

岩田 葵  
岡崎 幸子  
中川 天海

舞雜子

田 村

堀井 伶利  
渡部 諭  
古田 知英

赤井 要佑

胡 蝶

中川 天海  
渡部 諭  
古田 知英

上田 慎也  
赤井 要佑

融

竹内 勇輔  
渡部 諭  
古田 知英

上田 慎也  
赤井 要佑

鶴 龜

石原宗一郎  
渡部 諭  
古田 知英

上田 慎也  
赤井 要佑

番外仕舞

祝言 老 松 藤井 徳三

砧

井筒

シテ田中 貴瑛  
阪本康一朗

石原宗一郎  
三島 駿平  
水本 北斗

仕舞

松風

水本 北斗

OB連吟

富士太鼓

シテ 西田美恵子  
志智 裕美

中崎 和美  
長永 恭子  
高島 千明

OB素謡

ツレ東谷 晟

シテ里井三千雄

ワキ牧 千雄

八十周年記念自演会出演者・祝賀会出席者(芳名(敬稱略))

◆自演会出演者

里井三千雄

牧千雄

東谷晟

西野公三

前田紀一郎

佐々木肇宏

戸次威左武

段野治雄

黒田昌吾

尾島洋三

西田美恵子

高島千明

川達利招

武内安雄

河野豊

中崎和美

志智裕美

飯田博江

長永恭子

伏見和政

梅園健治

水本北斗

阪本康一朗

石原宗一郎

岩田葵

岡崎幸子

三島駿平

竹内勇輔

中川天海

堀井怜利

佐々木萌

田中貴瑛

◆祝賀会出席者

井川一宏

竹林英樹

左鴻雅義

久下昌男

林耕作

八十嶋敦子

福田啓介

伏見正章

内藤茂

馬島肇一

堀内克己

岩城真一

吉岡栄

藤原雅樹

戸中希

一色俊哉

川島淳美

長谷川愛子

ならびに自演会出演者

祖父と孫が共に歌う 学生・先輩・教官も……

## 能楽部

——謡曲を中心として——

### 1、神戸大学能楽部

顧問教官 竹林英樹（工学部助教）

師範 藤井徳三（能楽観世流職分）

部員数 十二名

明治末が大正頃から「鞍馬会」と称する謡曲部があつたが、昭和7年宇治正夫氏を師匠に迎え、同時に名を「神戸大学風韻会」と改め、同年母校に奉職した藤井茂先生がそれ以後顧問教官として会の世話に当たつた。

その後師匠は昭和五十九年、高齢のため宇治正夫氏から藤井久雄氏へ、同じく平成七年には現在の藤井徳三氏に引き継がれた。また顧問教官は、定年退官により昭和四十七年藤井先生から荒川祐吉先生に、同じく昭和六十二年井川一宏先生に、更に平成十九年現在の竹林先生に引き継がれている。

なお部の名称は昭和五十九年の師匠交代を機に「神戸大学能楽部」と変更になった。平成二十四年は丁度八十周年に当たるところから、記念自演会・祝賀会を催し、記念誌を発行した。

### 2、神戸大学風韻会OB会

荒川祐吉教授と一部卒業生有志が相談の上、部の卒業生の親睦を目的として発足。昭和五十四年に第二回OB会を御影の蘇州園に

て開催。会長は故米花稔名誉教授（昭和十一年卒）。謡を謡わないで懇親を目的にして毎年一回の総会を開催したが、謡う会「凌霄謡会」が盛んになったこと、大学のホームカミングデーの開催時期と競合したこと、会長の米花先生の逝去もあつて平成十七年の第二十七回をもって休会とした。

### 3、東京凌霄謡会

関東在住卒業生の同好の会

世話人 西野公三（昭和三十三年卒）

発足 昭和二十九年 登録会員数 十八名 他ビジター四名

昭和二十四年結成の「ヒマラヤ謡会」から「東京凌霄謡会」が発足した。歴代世話人には音申吉、高田透、西村二郎、安村慶次郎、大角征矢、四方常義、柳原仁哉から現在は西野氏が当たっている。毎月土曜日午後帝劇ビル地下2階の東京凌霄クラブで開催、通算六七〇回に及ぶ。近年風韻会や能楽部に所属した卒業生が増加し常時十五名前後で楽しんでいる。

### 4、凌霄謡会

関西在住卒業生の同好の会

会長 里井三千雄（昭和二十一年卒）

世話人 尾島洋三（昭和四十二年卒）、安藤幸雄（昭和四十三年卒）

発足 昭和三十八年 登録会員数 約七十名

東京凌霄謡会の活動に刺激されて井口宗敏氏（大正十一年卒）が中心になって組織された。歴代代表は井口氏、平成四年の氏の逝去後は

代表をおかなかったが平成十五年平田二郎氏（昭和二十三年卒）に、  
そして現在には里井氏が就任。世話人には藤井茂先生、松田幸次郎氏（昭  
和十九年卒）、戸次威左武・段野治雄（共に昭和四十年卒）が、そして  
現在は尾島・安藤の両氏。毎年一月と六月に発表会を開催するほか毎  
月第三日曜日には有志の練習会を開催している。場所は共に大阪駅前  
第三ビル十一階。現役能楽部員が毎回ほぼ全員参加し卒業生と共に  
謡い、世代を越えての交流の輪が広がっていることは誠に歓迎すべき  
ことである。

## 5、 大学教官議會

戦前藤井先生を中心に八木、白杉、川上、金田、花戸、古林、水  
谷、柚木、丹波、佐野、加藤、生島の諸教官、戦後も米花、荒川、  
山瀬、則武、向井、福光先生と経済・経営・法学部を中心とした謡  
愛好者が続いた。残念ながらその後の先生方に同好者が少なくなり  
自然消滅した。

## 6、 神戸大学宝生会

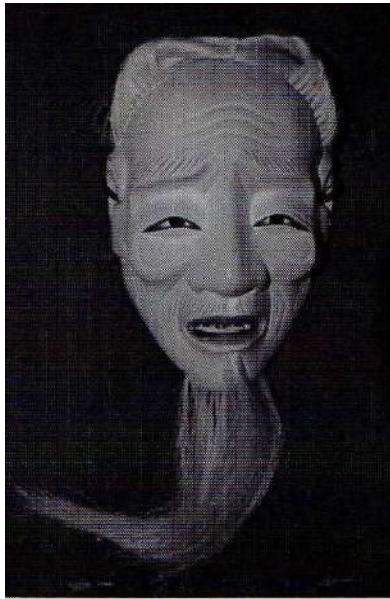
顧問に柴田銀次郎、師範に前田正の両先生のもとに昭和三十年代  
には活発な部活動が見られたが、昭和四十年代には部員の減少から  
自然廃部となった。平成二十四年五月に卒業生三十名弱が四十年ぶ  
りに集い旧交を温めたようだが、部活動の復活は難しいようだ。

昭和四十七年発行の会誌「風韻」第十二号の中で故藤井茂先生は「最大  
の特徴は、学生、先輩の強い連携と教官を加えての堅い組織体」「祖父と  
孫が共に謡う会」と大学の部活動を表現されたが、学内に限らず東西の

凌霜謡会にも通ずる名言である。

※以上 「凌霜百年」（平成十四年発行社団法人凌霜会百年記念  
誌三四七ページ）に許可を得て加筆修正しました。

記 段野治雄（昭和四十年卒）



「小牛尉」 丹羽啓裕

## 八十周年にあたって

新十三回生 段野治雄

八十周年記念事業実行委員会の卒業生委員の一人として皆様に改めて下記のことをお伝えしておきたいと思えます。

### 1、 八十周年の基点について

この件は卒業生の皆様には里井氏から平成二十四年六月の呼び掛け文中で触れて下さいました。神戸大学風韻会以前にも鞍馬会という部はあったのですが記録もなく活動の詳細が不明です。そこで故宇治正夫師匠と故藤井先生のお二人が中心になって声を挙げた昭和七年の風韻会をもって創部としてこれまで節目ごとに周年事業を催してきており、今回もこれを踏襲した次第です。

### 2、 会誌「風韻」の名を廃することについて

この度発行する記念誌の名は「神戸大学八十周年記念誌」とします。過去数回の周年記念誌には「風韻」を踏襲してきました。「風韻」は風韻会の会誌であったわけで部の名称変更以降は名を替えなければならなかったのですが、現役諸君が歴史を重んじ残したままにしてくれました。今回の八十周年に当たっては現役と卒業生が積極的に意思疎通を図ることが出来た中で、思い切って名称変更を実現させました。「風韻」に代わる趣ある名が付けられることを願っています。

### 3、 現役学生と卒業生との交流の場として

今回の記念事業に当たり学生諸君はたいへんな時間と労力を費やして盛大に立派に推進してくれました。敬意を表します。そして卒業生の皆様にはご寄付や自演会出演祝賀会参加に多大なご協力をいただきました。実行委員の一人として厚く御礼申し上げます。

この様な関係が築けたのも、振り返れば大阪で開催している凌霄誦会に現役の諸君が積極的に参加して、共に語りまた会の運営の手伝いをしてくれた、そんな中から部活動支援の空気も生まれてきたからだと思います。そして近年は毎回些少なながらも支援金を贈呈することも恒例になりました。さらに平成二十二年には福光功氏より亡き御尊父福光家慶氏（名誉教授、凌霄誦会会員）遺品の誦関連資料の御提供があり、これを機に卒業生に寄付を募ったところ下記のような次第となりました。ここにその内容を記し改めて謝意を表します。

#### ◆寄贈明細

有田栄一氏（昭和三十九年卒）から 誦本多数

松岡誠夫氏（昭和三十六年卒）から 誦本多数

福光功氏（昭和三十九年卒）から

誦のカセットテープ一式、レコード盤一式、誦本多数

平田二郎氏（昭和二十三年卒）から

夏用着物(新 一着、古着 三着)、袴(夏用 一着)、  
帯 七本、仕舞CD一式

原敏郎氏(昭和三十六年卒)から

袴(夏用 一着、合用 一着)、舞扇 二本、謡本

安藤幸雄氏(昭和四十三年卒)から 能面一

#### 4、 結びにかえて

学生時代風韻会や能楽部での部活動をされていない方々からもこれまでに色々とご協力いただいていることをお伝えしなければなりません。凌霜謡会は全学の卒業生で構成されていますが、その中には部の出身でない方もおられます。その方々には特別会員として部を応援して下さいよう。ご理解を得ています。今回の記念事業についても多くの方々から寄付金や祝賀会参加などのご協力をいただきました。中でも平田二郎氏がかねてより神戸大学の為に多方面にわたり献身的な支援をして下さっています。私達の活動に対しても前凌霜謡会会長時代を含めて常に細かい心配りをいただけてきました。今回の記念行事には都合により御欠席でしたが多額のご寄付を頂戴しました。特別会員の皆様にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

部の歴史の前半は顧問教官も含めて部員のほとんどが経済学部、経営学部、法学部の学生で占められていました。その後次第に多学部に広がり、今では顧問教官の竹林先生が工学部であるのを筆頭に部員の所属は上記の他に農学部、理学部、発達科学部、国際文化学部、海事科学部、

文学部と色々です。「能」を共通項にしてこの様に多彩な人たちが一緒に謡い、舞い、教え教えられ、合宿で同じ釜の飯を食う・・・何と素晴らしいことでしょう。神戸大学能楽部が益々発展してゆくことは間違いないと思います。一層の活躍を期待して部員の皆さんにエールを送ります。



「大飛出」 安藤幸雄

# 神戸大学能楽部歴史年表

| 西暦   | 年号   | 月日          | 主な出来事   | 世界史               |
|------|------|-------------|---|-------------------|
| 一九一五 | 大正四  |             | <p>観世流「青瓢会」発足（詳細不明）</p> <p>「鞍馬会」盛会（伊勢普宣師）</p> <p>藤井茂先生（風韻会初代会長）神戸商高に入学</p> <p>宇治正夫師による最初のお稽古（於 学生集会所）</p> <p>神戸商大謡曲大会（於 神戸商大講堂）</p> <p>宇治先生御指導下の最初の大会。素謡三番 仕舞九番<br/>独吟五番 番囃子一番 舞囃子一番 連吟一番</p> <p>「鞍馬会」から「風韻会」に改称</p> <p>（この間記録なし）</p> <p>戦後、大学の部活動中最も早く復活<br/>神戸大学発足</p> <p>学生連盟謡曲コンクール開始</p> <p>三大交歓会（現 旧三商大交歓発表会）開始</p> | 一九一四<br>第一次世界大戦勃発 |
| 一九一六 | 大正一五 | 四           |   |                   |
| 一九三二 | 昭和七  | 四<br>一・二・二五 |   |                   |

|      |      |               |   |                         |
|------|------|---------------|---|-------------------------|
| 一九六一 | 昭和三六 | 三・二六          | 会誌「風韻」創刊（現在、第二八号まで発行）   | 一九六四                    |
| 一九六二 | 昭和三七 | 五             | 申カツ屋「狸々」開店（於 開学記念祭）<br>赤字財政脱却の希望の星 五〇円／皿<br>後、「狸々」はおでん屋 ↓ 焼鳥屋 という歴史をたどる   | 催<br>東京オリンピック開          |
| 一九六四 | 昭和三九 | 六・一四          | 風韻会三〇周年記念大会（於 神戸大学講堂）<br>四大学交歓協会（現 三大学合同舞台）開始<br>四大学とは神大、甲南、商大、女子薬科大で、例年の女子薬科大との交歓祭が発展したもの。現在は神大、甲南、関学<br>姫路分校の鶴甲移転に伴い、風韻会姫路支部が鶴甲風韻会と改称<br>教養部にジュニア部室獲得 |                         |
|      |      | 六・二二          | 都留好子先生謝恩語大会（於 姫路本城能楽堂）<br>姫路支部風韻会の都留好子師への謝恩語会。素謡、仕舞、連吟。<br>参加数七十二名。   |                         |
| 一九六五 | 昭和四〇 | 四・一五<br>一一・二九 | 現部室へ移転（「やや狭いがござい」との記述あり）<br>神戸大学風韻会発表会開始（於 六甲台講堂）<br>顧問 柚木学長急逝により二〇日の予定を延期。舞囃子四番、番囃子一番、素謡三番、仕舞三二番、連吟九番<br>ジュニア合宿開始（於 麻耶山王蔵院）                            |                         |
| 一九六六 | 昭和四一 | ？             | 現在は人員不足の為此の行事は行われていない。  | 一九六六                    |
| 一九七二 | 昭和四五 | 一一・二六         | 大学紛争のあおりで活動混乱。春合宿中止<br>串カツ屋「狸々」全共同に屋台を壊される（於 学祭園遊会）<br>応急処置の後、営業続行。<br>学連秋季大会謡曲コンクール廃止。合同能開始「紅葉狩」   | 中国文化大革命<br>一九六九<br>月面着陸 |



|                      |                     |                     |  |  |
|----------------------|---------------------|---------------------|--|--|
| 一九七七<br>一九七九         | 昭和五二<br>昭和五四        | 九・一<br>?            | 藤井教授定年御退官祝賀記念素謡会（於 六甲松泉館）<br>素謡一七番、仕舞六番、舞囃子、独吟、連吟各二番<br>新会長に荒川祐吉先生就任される<br>神代風韻会四五周年<br>第一回風韻会OB会開催（於 蘇州園）<br>参加二四名<br>五〇周年記念秋季大会（於 上田能楽堂）<br>素謡九番、連吟二番、仕舞二五番、舞囃子六番<br>三二回生歓送謡会<br>宇治正夫師御指導下の最後の大会<br>藤井久雄先生にご挨拶<br>藤井久雄先生による最初のお稽古<br>藤井観護会春之会に初出演（連吟「楠露」）<br>「風韻会」から「神戸大学能楽部」へ名称変更。<br>宇治正夫先生逝去される<br>新顧問教官に井川一宏先生就任される<br>神戸大学能楽部六〇周年記念自演会（於 湊川神社神能殿）<br>史上初の学生能「土蜘蛛」を演能<br>藤井徳三先生が新師範就任される<br>以来、現在に至るまで丁寧にご指導下さっている。<br>藤井久雄先生逝去される。<br>関西学生能楽連盟を脱退。<br>藤井 茂先生逝去される。<br>神戸大学能楽部七〇周年記念自演会（於 藤井観護会舞台） | 一九七三<br>オイル・ショック<br>一九八〇<br>イラン・イラク戦争勃発<br>一九八三<br>藤井久雄先生自叙伝「鶏<br>肋抄」刊行される |
| 一九八二                 | 昭和五七                | 一一・二二               |  |  |
| 一九八四                 | 昭和五九                | 三・一七                |  |  |
| 一九八六<br>一九八七<br>一九九二 | 昭和六一<br>昭和六二<br>平成四 | 四・三<br>四・二二<br>五・二七 |  |  |
| 一九九五                 | 平成七                 | 七・二〇                |  |  |
| 一九九七<br>一九九八         | 平成九<br>平成一〇         | 二・二二                |  |  |
| 二〇〇〇<br>二〇〇二         | 平成一二<br>平成一四        | 六・三〇<br>一一・一五       |  |  |
|                      |                     |                     | 一九九五<br>阪神大震災<br>二〇〇一・九・一一<br>同時多発テロ   |  |

|      |      |                |  |                   |
|------|------|----------------|--|-------------------|
| 二〇〇五 | 平成一七 | 一〇・一           | 第二十七回をもって風韻会OB会総会を終了<br>春合宿（於 京都市伏見区 御香宮神社）<br>近くの旅館に宿泊し、本物の能舞台を借りて行う。<br>神戸新聞（三月一日）に関連記事。   | 二〇〇九<br>初の民主党政権成立 |
| 二〇〇六 | 平成一八 | ？              |  |                   |
| 二〇一一 | 平成二三 | 一〇・一二<br>三・一〇八 | 米花稔名誉教授（風韻会OB会会長）逝去。九十三歳。<br>春合宿（於 小豆島 きらく荘）<br>部員数の増加に伴い、久しぶりに学外で行われた。<br>ボランティア授業（於 カナディアンアカデミースクール）<br>外国人・帰国子女の小学生向けに能についてのレクチャーと体験教室を行う。翌年も行う。                                | 二〇一一<br>東日本大震災    |
| 二〇二二 | 平成二四 | 六・一七           | 関西学生能楽連盟春季大会（於 山本能楽堂）<br>この年より関西学生能楽連盟に復帰。旧三商合同発表会、三大学<br>合同舞台と開催時期が近いため反対意見もあり、調整に時間を要<br>した。<br>神戸大学能楽部八〇周年記念自演会（於 藤井観瀛会舞台）<br>素謡五番、連吟五番、仕舞六番、舞囃子四番<br>八十周年記念祝賀会（於 ANAクラウンプラザ神戸） |                   |
|      |      | 一一・一           |  |                   |

## 編集後記

「神戸大学能楽部八十周年記念誌」をお届け致します。

当初、私共学生は八十周年記念の催しを考えるにあたり、ごく簡単なものを想定しておりました。しかし、多くの方々の御協力により、自演会・祝賀会の二部構成の会を催すこととなり、先日、無事盛会のうちに終えることが出来ました。

この記念誌も当初は、誠に恥ずかしながら、寄稿を集めて、年表と名簿を更新すれば秋頃には完成するだろうくらいに考えておりました。それがここまで内容を充実させることが出来ましたのも、寄稿・寄付をくださった方々をはじめとし、編集にあたって貴重な御提案をしてくださった方々など、多くの御助力あつてのことと存じます。拙い編集ではございますが、お楽しみいただければ幸いです。

なお本誌はOBの方々との話し合いにより、これまで十周年ごとの会誌名称として使われてきた「風韻」を使わず、「神戸大学能楽部八十周年記念誌」とさせていただきます。この経緯については、本誌中の「八十周年にあたって」(段野治雄氏)の記事に詳しくございます。

一時期は部員数が数人という時期もございましたが近年はだいぶ回復しており、十二人までになっております。神戸大学能楽部の九十周年、百周年も祝う事ができるよう願うばかりでございます。

平成二十四年十二月吉日

記念誌担当 岩田葵

岡崎幸子

平成二十五年二月 発行

発行者 神戸大学能楽部八十周年

記念事業実行委員会

実行委員長 石原宗一郎

祝賀会担当 阪本康一郎

記念誌担当 岩田葵・岡崎幸子

総務担当 三島駿平

卒業生代表 里井三千雄